

■瞳子スカウト女子敗北輪姦

イナズマキャラバンと宇宙人達との戦いも佳境に入った。

キャラバンチームがマスターランクと激戦を繰り広げ、しばしの休息を取っている間、雷門でもまた激戦が繰り広げられていた。エイリアの隠されたチームの存在に気付いていた瞳子は秘密裏にセカンドチームを結成しており、取り込まれた選手達が完全に闇に堕ちキャラバンのチームと顔合わせする前に救いだそうとしたのだ。

エイリア石が破壊された今、セカンドチームでも勝機が見込めたはずだった。しかし破壊したはずのエイリア石の一部がなぜか逃げ出した剣崎の手にあり、しかも更に効果を上げている。ほぼ完成されていた敵チームの前に、セカンドチームは善戦空しく破れ散った。

「そんな、みんなっ……！」

超次元サッカーで傷付いた体はまさに満身創痍。軽傷で済んでいるのがおかしいくらいだ。

「こんなんでもオレ達に盾突こうってのか、笑わせんな！」「監督う、こいつらヤッチャっていいんすよねえ？w」

敵主力のFWが一笑したと思うと、MFの一人が力なく横たわる女子を下卑た目付きで見下した。なんと彼らは傷付いた彼女達を、監督の瞳子を含め陵辱しようとしているのだ。しかも信じられないことに、それが日常茶飯事であるかのような口振りだ。

「なっ、やめなさい貴方達、っ！」

止めようとする瞳子だが、敵チームに陵辱の許しか出るや否や、すぐに選手達に取り囲まれてしまう。とても庇うことなどできず、冷然としていた美人監督よりも先に選手に毒牙がかかる。

敵メンバーが次々と女子を捕まえていく中、一人が余裕を持って歩を進める。敵FWが、前もって予約していたように誰も手を出さない女子選手に近付いた。餌食になろうとしているのはセカンドチームの中心的人物、大谷つくしだ。

「な……何するの〇〇くん！ 離して……きやあっ！」

男が乱暴にへたり込む女子のユニフォームを捲り上げた。疲労困憊の彼女に抵抗する力はなく、たっぷり実った乳房を晒された。

「い、イヤ、やめて〇〇くんっ！」

走り回ったからなのか、微かに朱くなった肌を白のスポーツブラが包んでいる。

「チッ、色気ねえな……」

物足りなさそうに呟くと、コットン越しに彼女の胸を力強く揉み込んだ。

「イヤ、イヤあ……あああっ?!」

年相応には見えない節くれだつた指が食い込む。何の遠慮もない暴力。性感など得られない……筈だ。しかし大谷を襲ったのは、痛みではなかった。今までに感じたことのない何か。いや、この感覚に覚えはあるが、慣れていないので大谷にはわからない、何か。触れられた面が熱くなったような感覚を伴い、それが体の芯まで響いてくるようだ。

「や……やめ……てっ!」

得体の知れない感覚に、つい恐怖に似た感情を覚えて拒んだ。力ない両手で相手の手首を掴むが、太い骨肉はビクともしない。「おー出た出た、おっぱいクラッシュ」 「っせーな黙ってろ」

そんな乱暴をMFが軽快に観察し、それに文句で返すFW。二人の皮肉じみたやりとりは以前と大差がないが、それ以外は洗脳前では予想もできない邪悪さだ。

やりとりをしながら男が埋めた指を這いずらせる。着心地のいいスポーツブラの摩擦が、痛みではない感覚をより強く肌に染み付かせていく。

「そっ……〇〇、くんっ! あなた、何をしてるか……わかって、っ——……!」

骨太が食い込む度に熱さが増していく。また一揉み、二揉み、節くれが乳頭を圧迫し、痛いはずなのに——

「やめて〇〇くん、やめ……っはああん!」

(ウツ、わたし、こんなことされてるのに……)

両胸が掬い上げられ、柔肉を内側に押し潰される。

「やめ、あはあっ!」

(へ、へんな声、出ちゃうう……!)

それまで仲間を助けると強い眼差しを放っていた双眸が、その気高さを失っていく。気を張って大きな目を吊り上げていたのに、だんだん戻っていき、それどころか弱々しく緩んで眠そうになる。

「ああ? お前こういうのが好きなのかあ?」

二つの乳肉を離し、再びぶつけ合う。AVでもあまり見られないような乱暴な扱いだというのに、更に熱さが深く浸透する。ぶつけられた柔肌で厭らしい谷間を作られ、また離しては先をちぎるかと思える揉み込み。捏ねては持ち上げ、またぶつける。腕の動きも速さを増し、大谷の両手はついていくので精一杯。今すぐにも突き放したい筈なのに、まるで遅しい筋肉に摺り寄っているようにすら見える。

「や、やめ、てっ、あふう! あっ、あひ♥ こんなの、ヒドいよ、あはあああ!♥」

立ち籠める疚しい気分を払おうと拒絶を口にするが、すぐさまかき消され、甘い音色が止められない。指が埋まるごとに腹部が

反応して跳ね、乳首は痛痒くなっていく。

（お、おかしいよ、これっ……！ まるでわたしの体じゃないみたいに……っ！）

変わっていく、変えられていく自分を見ていられず、咄嗟に目を閉じて顔を背ける大谷。それが気に食わない少年は、頃合いになった先端を一段と強く抓み、乳房を伸ばさんと上に引っ張り上げる。

「っああああっ！」

「目え閉じてんじゃねえっ、てめえのコレよく見てみる！ ああ!？」

痛みに似た鋭い感覚。堪らず首を反らして大きく口を開ける大谷に、見せ付けるように乳首を捻る。

「だ……め、やめて、痛……いいいんっ！」

痛くはなかった。身体が危険を教えるために痛覚を覚えなければならぬのに、壊されそうな刺激に故障させられたようにその機能を失っている。

悔しさからか、胸に込み上げる何かに涙をうっすら浮かべた眼を左右に揺らし、否定するが……。

「キモチインだろ、あっ?!」

クリイツ！

「あひいいうっ！♥」

痛くはない。痛いはずなのに、痛みを感じない。気持ちよくもない……気持ちいいはずがない……なのに——

ぐにっ！

「あ、あっ！♥」

「こんなビンビン勃たせてよお！ イインだろ、オラッ！」

キュウツ！

「あはあああっ！ ちが、ちがうのお！」

乳房全体への責めから、乳首への集中した苛めに替えられる。じわじわと染みてきていた熱がズンズン突き刺さっていき、衝撃で情けない声が漏れる。

「何が違うって？ 布越しに分かつぞ、勃起しまくってんだろが、ちゃんと見ろ！」

「イヤ、イヤあっ、見せない……」

ぎゅううう!!

「あっっ…あああああああ!!」

腫れたような感覚がある乳端をつい見てしまい、乳首を凝視させられながら悲鳴を上げる。膨らんで硬くなったそれは、もう自

分のものではないかのようだ。自分の意志に反し、男の手に寝返った先端。太い指に押されて容易く形を変えながら、それを楽しむようにすぐ元に戻り、生意気な反抗をしてはまた打ちのめされる。

「イヤ、違うってっ、あひっ！」

屹立して弾力に富むそれは、過去に悪友に見せられた成人本の中に似ていた。凜々しい顔立ちで、綺麗な桃色。なのに、男の手に弄ばれたそれは、今の大谷のものと同じく少しばかり肥大していた。寒くて肌が粟立った時も、あんなに大きくなったことはない。そんな風になるのは、きっと――。

ぐにゅううっ!!

「ああああ、っはああんっ!!♥」

「乳首で感じてンだろ、あ?!」

違うはずだ。こんなに乱暴にされて、あり得ない。でも熱さがどんどん伝わって、胸が、身体の内側が痺れてくる。気だるい。熱っぽい。力が入らない。お腹の奥が疼いている。甘ったるくなって、舌が震え、口が開いてしまう。この変な感覚って――?!

(き、気持ちイイっ!)

「違ううっ!!」

自分の思考を、首振りで薙ごうとする。

「よくないっ! ヘンなコト言わないでっ!」

(気持ちよくない、気持ちよくない、気持ちよくないっ!)

動く部位で反発し、麻痺してきた心と頭を保たせる。試合で負けて、その上こんな仕打ちにも惨めな姿を晒すわけにはいかない。

「ま、負けないからっ!」

「あっそ」

敵意をぶり返したかに見える眼で睨む。しかしそんな大谷の眼差しを、強面だった顔が嬉しそうに不敵な笑みを浮かべる。

自らの口から屈服を吐かせようとしていたはずだが、素っ気ない返事で、むしろ反抗を望んでいたかのようだ。

「やっばそうやって歯向かってくんねえとなあ」

屈させるのには飽きたと言わんばかりの口振りで、更に責めを変える。乳頭部分を優しく二本の指で挟むと、縦に小さく引っ張り、また押し返して今度は乳輪の中に少し埋める。先程までとは打って変わって、柔らかい刺激を何度も繰り返す。

「な、何を、んっ!」

(あああ、急にやさしくう……!)

無骨な指で器用に乳首を引いては押しを素早く連発する。優しいながら卑猥な動きは、まるで男性が自慰する時の動き。勃起し

た乳首をペニスに見立て、甘い刺激を注送され続ける。

「んっ、あ♥ ん…くひっ！」

「あ〜シコリだした、もうダメだわ」

目を薄めて必死に声を押し殺す大谷を、遠巻きに見ていた MF が茶化す。

「うわスゲェアへ顔。大谷さん、アへ顔って分かる？ 一目見ただけで気持ち良くなってるって分かる顔」

ニコニコ愉快そうな顔で、くぐもった声を出す大谷の顔を覗き見る。かけられた言葉の意味より、誰かに見られているという自覚が女選手に激しい羞恥を突き付ける。

「イヤっ、見ないでっ！」

「あーそうやって隠すと…」

両手で顔面を覆う。その次の瞬間、少年から送られる指刺激が柔らかさをそのままに速度を増す。指と桃端の摩擦から、**シコシコ**と音が聞こえそうだ。

「あ〜あ、両手離すから」

か弱い手での防御など、何の苦にもならなかったはずだ。なのに急に動きを速め、まるで大谷の抵抗が緩んだがためと、これ見よがしに抜く。

「だ、ダメッ♥」

急激な刺激に堪らず、再び手首を掴む。しかし掴むというよりは指を這わせるだけで、まともな抵抗ができない。勿論、抜く手の動きは変わらない。

「ダメ、ダメっ♥ 止まってえええ！」

今にも涙が零れそうになり、すすり泣くような声で懇願する大谷。そんな非力な者の背後に回り、6番がすぐ後ろで囁いた。

「ダメって何が？ 気持ちイイのがダメなの？」

「あふっ♥ だからっ、違うってっ！」

「しょーがねーじゃん、コレもエイリア石の力なんだから」

「…えっ?!」

目を見開き、間拔けな声を出す大谷。

「この気持ちイイのもエイリア石の効果なんだよ。スゲェんだぜコレ？ ほら、アレ見てみ？」

そう言って責める男の向こう側を指差す。そこにはチームメイトが股間に指を入れられ、白い液体をかけられ、体を揺さぶられ、

男の思いのままに使われていながら、大谷と似たような甘い叫びを上げている。涙を流してはいるが、あまり辛そうには見えない。むしろ――。

「いやっ!♥ イクッ!!♥♥」

「ま、またっ♥ 来るッ♥ イクッ!!♥♥」

「やめて、やめてっ、い、イクうっ♥♥♥」

「あ♥ あひい♥ イクっ!♥ イクううう!♥♥」

「イクううう!♥♥」「あ、あたしも、イクッ!!♥♥」「いやっ!♥ わたしも……イグうううう……ッ!♥♥♥♥」

「あ♥ やめ♥ だめ♥ も、もうイカせないでええ!♥♥」

「ひっ?!♥ ま、待っ……て……♥ イッ……てる、から……中は♥ 中だけは……っ!!♥♥」

ドグウウウ!!! ビュウウウッ!!! ビュバァァァッ!!!

「あああ!!♥♥ あああああああっ!!♥♥ イクッ!!♥♥ イクうううううううう!!♥♥♥♥」